HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ユダヤ的メトニミーの実践分析 : ネリー・ザックスの詩の原理
Author(s)	吉川, 千穂
Citation	独語独文学研究年報, 35, 21-36
Issue Date	2009-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38100
Type	departmental bulletin paper
File Information	35_p21-36.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ユダヤ的メトニミーの実践分析
― ネリー・ザックスの詩の原理 ―

吉川　千穂

0. 序論

本誌第 34 号において、筆者はネリー･ザックスの詩の構造を、ユダヤ的思考原理としてのメトニミーという観点から論じた。[1]そこで明らかになったのは、聖書テクストの解釈にみられるユダヤ人の思考のあり方の根底に、隣接関係に基づくメトニミーが働いていること、また、1940 年代に成立したネリー･ザックスの詩においても、このユダヤ的メトニミーが観察されることである。筆者は、ある物事に対して発想の連続性をもって描写を並置、関連させ、物事の全容に近接的に迫る表現方法をメトニミーと定義し、意味的、構造的に類似する詩行の並置に注目したメトニミー分析モデルを打ち立てた。他方、本誌第 34 号で取り上げた詩は数編にとどまり、ザックスの詩作品全体について論じるには至らなかった。

このユダヤ的思考形式としてのメトニミーは、聖書釈義のみならず、聖書テクストの中にも観察される。ザックス研究の基礎を築いた一人であるペーター・ザーガー（1970）も述べているように、詩行の反復と並行（パラレリズム）をヘブライ詩文の最も基本的な文体であるとし、聖書、とりわけ『詩篇』にみられる語や詩行のパラレリズムは、極めてユダヤ的な文体的特徴であり、ザックスはそれを大々的に踏襲している。[2]

本稿では、筆者のメトニミー分析モデルに基づき、ザックスの全詩集についてメトニミー分析を行い、通時的観点からザックスの詩に全体像を提示することを目標とする。第一章では、ユダヤ的メトニミーの概念をより具体的に理解するべく、聖書におけるメトニミー表現のあり方について論じ、その後、現代のユダヤテクストであるザックスへと論を展開してゆくことにする。

1. メトニミー的テクストとしての聖書

旧約聖書において、意味的、構造的類似表現を並置させる対句法（パラレリズム）を用いた詩文形式は、成立時期の古い『詩篇』や『イザヤ書』、『アモス書』等の預言書、『雅歌』、『箴言』、『知恵の書』に数多く見られる。関根（1967）は、これらヘブライ詩文の成立を、古代イスラエル人の思惟方法の三段階にわたる歴史的発展の、もっとも早い段階に位置づけており、ヘブライ民族の間では、はっきりしたリズムをもった詩文の方が文学形態として日常のことばに近い散文より古かったようである。[3]『創世記』に始まる「モーセ五書」においては、エデンの園のア

---

[1] 吉川千穂『ネリー･ザックスの詩の構造― ユダヤ的思考原理としてのメトニミー ―』、北海道大学独語独文学研究年報』、第 34 号、北海道大学ドイツ語学・文学研究会、2007 年、19 頁－。

[2] Sager, Peter: Nelly Sachs. Untersuchungen zu Stil und Motivik ihrer Lyrik. Bonn, 1970, S. 206ff.

[3]さらに、古代人の思惟方法の論理性は、古代オリエントの宗教や神話等に見出される原始人の前論理的な段階、紀元前 1300～400 年にイスラエル人によって生み出された文献を支配する経験的・論理的段階、ギリシャ人の間で発達した形式論理の段階に分けられるという。彼は法の領域を例に挙げているが、バビロニアやヒッタイト法にはそれぞれの具体的な場合を規定しているだけで、どこにも総括的な命題がないとしている。関根正雄「イスラエル人の思惟方法」、『古代イスラエル研究』所収、岩波書店、1969 年 3-4 頁。

ダムとエヴァの物語から出エジプト、モーセの死まで、イスラエル民族の歴史は主に散文形式で書かれているが、バラムの託宣（『民数記』23；8-10、19-24、24；5-9、15-25）、モーセの十戒（『申命記』27;9-26）、モーセ死去の直前に民衆に告げた二つの韻文、モーセの歌（『申命記』32;1-43）、モーセの祝福（『申命記』33）といった、託宣や神のことばにおいては、詩文形式がとられている。[4]ここで、実際に旧約テクストにみられるパラレリズムの例をいくつか挙げてみよう。以下の一節では、同一構造をもつ詩行が 5 つ、その後ヴァリエーションが、語順の変化、関係節の付随をもって並置している。身体の部分に焦点が置かれ、背教者が身体の側面的描写の累積として描かれている。

Sie haben Mäuler, und reden nicht;	口があっても話せず
sie haben Augen, und sehen nicht;	喉から言葉を話さない。
sie haben Ohren, und hören nicht;	耳があっても聞こえず
sie heben Nasen, und riechen nicht;	鼻があってもかぐことができない。
sie haben Hände, und greifen nicht;	手があってもつかめず
Füße haben sie, und gehen nicht;	足があっても行くことができず、
sie reden nicht durch ihren Hals.	喉から言葉を話さない。
Die solche machen, sind ihnen gleich,	偶像を造り、それに依り頼む者は
und alle, die auf sie hoffen.[5]	皆、偶像と同じようになる。[6]

『詩篇』115：5-8

これに続く詩行では、上記の背教者に相対するものとして、信者が名詞句のヴァリエーションによって表される。主語である名詞「イスラエル」が名詞句「アロンの家」、関係節「主を畏れる人」へと、徐々にヴァリエーションをもって意味拡張されている。

ここでは、同義である別の表現が用いられ、行為の描写の連続として敵の存在が描かれている。

Alle Heiden umgeben mich;	国々はこぞってわたしを包囲するが
aber im Namen des HERRN will ich sie zerhauen.	主の御名によってわたしは必ず彼らを滅ぼす。
Sie umgeben mich allenthalben;	彼らは幾重にも包囲するが
aber im Namen des HERRN will ich sie zerhauen.	主の御名によってわたしは必ず彼らを滅ぼす。

[4]『ヨシュア記』以降の歴史書もまた、ほぼ全体が散文であり、『サムエル記上・下』、『列王記上・下』、『歴代誌上・下』、『エズラ記』、『ネヘミヤ記』、『エステル記』のうち、詩文形式を取っているのは『サムエル記上』2;1-10 ハンナの祈り、ダビデによる哀悼の歌（『サムエル記下』22;2）など、ごく少数である。

[5] ドイツ語訳聖書は、Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers. Hrg. von der Evangelischen Kirche in Deutschland. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1985 を参照。改行は、パラレリズムを理解しやすいよう、和訳に合わせ、筆者が自ら行った。

[6]『聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき』、日本聖書協会、2000 年。以下同様。

Sie umgeben mich wie Bienen;	蜂のようにわたしを包囲するが
aber sie erlöschen wie Feuer in Dornen;	茨が燃えるように彼らは燃え尽きる。
im Namen des HERRN will ich sie zerhauen.	主の御名によってわたしは必ず彼らを滅ぼす。

『詩篇』118：10-12

以下は、13 行にわたるパラレリズムの初めの一節である。3-4 行目に、類似構造と意味的な連鎖が観察される。

Wohl dem Menschen, der Weisheit findet, und dem	いかに幸いなことか
Menschen, der Verstand bekommt!	知恵に到達した人は
Denn es ist besser, sie zu erwerben, als Silber;	銀によって得るものにまさり
denn ihr Ertrag ist besser als Gold.	彼女によって収穫するものは金にまさる。

『箴言』3:13-14

次のパラレリズムでは、構造的に類似する 1-2 行目と 3-4 行目が意味的対比をもって関連し、神とユダヤ人がその関係において表現されている。

Ein Ochse kennt seinen Herrn	牛は飼い主を知り
und ein Esel die Krippe seines Herrn;	ろばは主人の飼い葉桶を知っている。
aber Israel kennt's nicht,	しかし、イスラエルは知らず
und mein Volk vernimmt's nicht.	わたしの民は見分けない。

『イザヤ書』1:3

関根（1969）によると、ヘブライ文学の文体的特色である対語ないし対句法（パラレリズム）は、小さな語や句にまでおよんでいるという。[7]メトニミーが通常、語のレベルの現象として定義されていることを考えると、命題や語句といった様々な言語単位における並行関係を話題にする彼の指摘は興味深い。

2. ネリー･ザックスの詩の原理 ― メトニミー分析

筆者の知る限り、日本の文学研究において、メトニミーに注目した言語理論に関する議論はあっても、それを実際の文学テクストに適用し分析を実践した例はない。以下では、本誌第 34 号で作成した筆者のメトニミー分析モデルにしたがって詩の分析を行い、通時的視点からザックスの詩作品の全体像に迫りたい。

2.1 第一詩集『詩の棲家で』（1946 年）

概して、ザックスにおいてメトニミーは、1943-46 年に成立した第一詩集『死の棲家で』と 1947-48 年成立の第二

[7] 関根（1969）5-6 頁。

詩集『星の蝕』に集中的に現れる。第一詩集のテーマは、主として 20 世紀ユダヤ人のジェノサイドに関係しており、現代のジェノサイドを旧約聖書の世界と関連づけたもの、ジェノサイドの加害者、そして圧倒的に多いものとして、母と子の別離といった、ごく身近に存在する犠牲者がある。筆者作成のコンコーダンスによると、Mutter や Kind の出現頻度もまた、第一、第二詩集においてとりわけ高いことがわかる。[8]

EIN TOTES KIND SPRICHT	死んだ子が言う
DIE MUTTER hielt mich an der Hand.	お母さんはぼくの手をつかんでいた。
Dann hob Jemand das Abschiedsmesser:	するとだれかが別れのナイフをかかげた。
Die Mutter löste ihre Hand aus der meinen,	お母さんはぼくから手を離した。
Damit es mich nicht träfe.	ナイフがぼくに当たらないよう。
Sie aber berührte noch einmal leise meine Hüfte –	でもお母さんはもう一度ぼくのお尻に触れた―
Und da blutete ihre Hand –	するとお母さんの手は血だらけだった―
[…]	[…] FS013

「死んだ子が言う」と題されたこの詩は、一人称による子供の発話内容である。Mutter を主語とする過去時制の構文が三つ、母親および母親に死をもたらす凶器を描写した過去時制の構文が三つ、計 6 行の詩行が交互に現れ、時間の経過とともに母子の行為、様態の漸次的な変化が子供の視点から描かれている。1、3、5 行目は、同一の主語に対し動詞が変化する。「母親が子に触れ」（第 1 行目）、「子から離れ」（3 行目）、そして再び子に触れる（5 行目で）。母と子の隣接関係は „an der Hand“（1 行目）、„aus der meinen“（3 行目）という前置詞句の対比にも現われている。両者の接点は Hand だけであり、母と子の人物描写にはこの断片にのみ焦点が置かれている。2、4、6 行目では、時の推移を表す品詞 „Dann“、„Damit“、„Und da“ で始まる別の類似構造が並置している。何者かが凶器である「別れのナイフ（Abschiedmesser）」を掲げ（2 行目）、母親はその凶器を指す指示代名詞 es が子供に当たらぬようにし（4 行目）、その結果として「母親の手（ihre Hand）」が血を流す。このように、Mutter を主語とする奇数行の詩行の後に、凶器による母子への蛮行が偶数行に描かれ、犠牲者および加害の側にある別れのナイフの行為が因果関係をもって交互に連なって、意味と構造が漸次差異化、拡張してゆくのである。

次の詩では、「おまえ」という不特定の犠牲者像が、メトニミーによって形成されている。

[…]	[…]
QUAL, Zeitmesser eines fremden Sterns,	苦悩、見知らぬ星の時のナイフ
Jede Minute mit anderem Dunkel färbend –	一秒ごとに違う暗さで染めながら ―
Qual deiner erbrochenen Tür,	おまえのこじ開けられた扉の

[8] 吉川千穂　博士論文『ネリー・ザックスの詩の構造―ユダヤ的思考原理としてのメトニミー―』（2007）付属資料のテクストコンコーダンスを参照。

Deines erbrochenen Schlafes,	おまえのこじ開けられた眠りの、
Deiner fortgehenden Schritte,	最後の命を数える
Die das letzte Leben hinzählten,	立ち去りゆくおまえの足どりの、
Deiner zertretenen Schritte,	踏みつぶされたおまえの足どりの苦悩、
Deiner schleifenden Schritte,	ひきずりゆくおまえの足どりの苦悩
Bis sie aufhörten Schritte zu sein für mein Ohr.	そして足どりはもはや私の耳に聞こえなくなった。
[…]	[…] FS028

「苦悩（Qual）」を修飾する二格の名詞句が四つ並置している。侵入され（3 行目）、眠りを妨げられ（4 行目）、連行され、(5-6 行目)、虐待され（7 行目）、死に向かって歩く（8 行目）。死にいたる「おまえ」が、その「足取り（Schritte）」の状態の段階的推移として描かれている。人物の部分的様態について、類似する文構造を重ねてゆくことで、殺されてゆく人物の全貌がリアリティーをもって想起される。

ザックスにおいて、身体にまつわるメトニミーは実に多い。以下の詩では、眼や手といった、人体においてとわけ重要な役割を果たす語句が主体となり、メトニミーが犠牲者像の形成に効果的に働いている。

[…]	[…]
Wieviel brechende Augen werden euch ansehn	おまえたちが人目につかぬ場所からスミレを摘む時
Wenn ihr aus den Verstecken ein Veilchen pflückt?	どれほどの瀕死の眼がおまえたちを見つめるだろう？
Wieviel flehend erhobene Hände	殉教のごとく絡みついた
In dem märtyrerhaft geschlungenen Gezweige	古い樫の木の枝に
Der alten Eichen?	どれほどの手が懇願し掲げられただろう？
[…]	[…] FS020

[…]	[…]
Doch deine Füße, längst gewohnt das Wandern	だが久しく放浪に慣れたおまえの両足は
Wußten nun den Weg, den andern.	いまやもう一方の道を知った。
Deine Augen, die die Elle abgemessen	尺度を測っていたおまえの両眼は
Tauten Spiegel aus dem längst Vergessen.	長い忘却の中から鏡を引っ張り出した。
Deine Hände, die die Münze nahmen	硬貨を取っていたおまえの両手は
Starben wie zwei Beter mit dem Amen.	アーメンと祈る二人のように死んだ。 FS034

後者の詩の題名は「行商人(HAUSIERER)」であるが、ザックスの知人のイニシャルが添えられており、ナチスドイツの犠牲となった実在の人物について書かれたものである。「おまえの両足（Deine Füße）」（1 行目）、「おまえの両眼（Deine Augen）」（3 行目）、「おまえの両手（Deine Hände）」（5 行目）は、どれも行商に不可欠な身体の部位であ

り、これらの名詞句を主語とした類似する文構造の並置によって、行商人の全体像が近接的に描かれている。[9]

加害者像もまた、身体の側面描写の累積によって形成されている。

[…]	[…]
Hände,	手よ、
Des Leibes Tabernakel aufbrechend,	肉体の幕屋をこじあけて
Der Geheimnisse Zeichen wie Tigerzähne packend –	神秘のしるしを虎の歯のごとくつかみ―
Hände,	手よ
Was tatet ihr,	おまえたちは何をした
Als ihr die Hände von kleinen Kindern waret?	その手が子供だった頃？
Hieltet ihr eine Mundharmonika, die Mähne	ハーモニカをつかみ、ゆり木馬の
Eines Schaukelpferdes, faßtet der Mutter Rock im Dunkel,	たてがみをつかみ、暗がりで母親のスカートをつかみ
Zeigtet auf ein Wort im Kinderlesebuch –	子供の本のひとつの言葉を指した―
[…]	[…] FS015

Hände の行為を表す二つの分詞構文（2-3 行目）では、手の段階的行為を表す aufbrechend、packend が行末に、二格名詞によって修飾された四格目的語の名詞句 „Des Leibes Tabernakel“、„Der Geheimnisse Zeichen“ がそれぞれ前置している。Tabernakel はユダヤ教の神をまつる場であるが、その幕屋をこじ開け、幕屋に収められたトーラーの文字であろう「神秘のしるし」をつかむ Hände の行いは、神を葬る行為そのものである。さらに、Hände はアジアの動物である「虎（Tiger)」に例えられており、同一名であるナチスドイツの戦車を連想させる。

二度目に現われる Hände については、その過去の行為へと話題が移行するため、先のものとは別のパラレリズムを形成している。いまだ残虐な行為を知らない加害者の幼少期について、„Hieltet ihr ~“、„faßtet ~“、„Zeigtet ~“ と三つの行為の描写が連ねられている。Hände に関わるのは、玩具や母親のスカートと言った、子供の周辺にありそうな典型物である。殺害行為とは対照的な情景描写を並置することによって、加害者の残虐性が浮き彫りにされている。

加害者は、その手の描写によってのみ描かれている。全体像が読者の想像に委ねられていることによって、手の背後にある何か巨大で不気味な存在が暗示されている。

ところで、本誌第 34 号で例を示したように、ザックスにおいてジェノサイドは、旧約に始まるユダヤ人の受難の歴史の上に位置づけられている。[10]第一詩集における旧訳の固有名の出現頻度も高い。

WIR STEINE	石である私たち
Wenn einer uns hebt	だれか私たちをかかげるならば

[9] さらに言うならば、伝記的に詩を献じた人物の特定は可能であるものの、Hausierer への隠喩化、イニシャルに留めておくことによって、犠牲者が不特定の人物一般を想わせることに成功している。
[10] 吉川（2007）20-22 頁。

Hebt er Urzeiten empor –	その者は始原の時をかかげるのだ—
Wenn einer uns hebt	だれか私たちをかかげるならば
Hebt er den Garten Eden empor –	その者はエデンの園をかかげるのだ—
Wenn einer uns hebt	だれか私たちをかかげるならば
Hebt er Adam und Evas Erkenntnis empor	その者はアダムとエヴァの知恵をかかげるのだ
Und der Schlange staubessende Verführung.	そして蛇の塵喰う誘惑を。
Wenn einer uns hebt	だれか私たちをかかげるならば
Hebt er Billionen Erinnerungen in seiner Hand	その者は手の中にある何十億もの記憶をかかげるのだ
Die sich nicht auflösen im Blute	それは夕方のように
Wie der Abend.	血の中に解けることはない。
Denn Gedenksteine sind wir	というのも私たちは記念碑なのだ
Alles Sterben umfassend.	あらゆる死を包みながら。
[…]	[…] FS058-059

„Wenn einer uns hebt, / hebt er ~ empor — “ という構文が、„Wir Steine“ のあとに三つの並置している。主文中の四格目的語がと変化し、石を掲げる wir の行為は意味的に徐々に旧約の歴史へ関連し、同一視されてゆく。本来、石は化石であり時間を内包するものととらえることが可能であるが、Stein はまず「始原（Urzeiten）」（3 行目）という比較的抽象的な時間表現へ、次に、具体的な神話すなわち旧約の固有名 „Garten Eden“（5 行目）、„Adam und Evas Erkenntnis“（7 行目）へ、そして蛇の誘惑„der Schlange staubessende Verführung“（8 行目）といった神話の特定の場面を構成する語句へと漸次変化する。また、第二連で wir がユダヤ人の受難の歴史と同一視されていることから（第二連 1-2 行目）、現代のジェノサイドが第一連の旧約の世界へと関連づけられていることがわかる。

EINER WAR,	昔々
Der blies den Schofar –	ショファールを吹き鳴らす者あり—
Warf nach hinten das Haupt,	頭を後ろへ反らし
Wie die Rehe tun, wie die Hirsche	泉で水を飲む
Bevor sie trinken an der Quelle.	ノロジカのように、雄ジカのように。
Bläst:	吹き鳴らす：
Tekia	テキア
Ausfährt der Tod im Seufzer	死がため息をついて出発する—
Schewarim	シュヴァリム
Das Samenkorn fällt –	穀粒が落ちる—
Terua	テルア
Die Luft erzählt von einem Licht!	大気が光について語っている！

Die Erde kreist und die Gestirne kreisen	地球は廻り星星は廻る	
Im Schofar,	ショファールのなかで―	
Den Einer bläst –	そしてある者が吹き鳴らす―	
Und um den Schofar brennt der Tempel –	するとそのショファールゆえに寺院が燃える―	
Und Einer bläst –	そしてある者が吹き鳴らす―	
Und um den Schofar stürzt der Tempel –	するとそのショファールゆえに寺院が崩れる―	
Und Einer bläst –	そしてある者が吹き鳴らす―	
Und um den Schofar ruht die Asche –	するとそのショファールゆえに灰が安らう―	
Und Einer bläst –	そしてある者が吹き鳴らす―	FS014

「昔々／ショファールを吹き鳴らす者あり」という詩冒頭のフレーズに対応して、6 行目の „Bläst:“ 以降、Einer によるショファールの吹奏とその結果発生する事象の呼応関係が、二種類のパラレリズムによって描かれている。7-13 行目では、因果関係で結ばれた二行構成のパラレリズムが三つ並置し、計 6 行の詩行が呼応関係を保ちながら展開する。すなわち、ショファール[11]で「テキア」、「シェヴァリム」、「テルア」[12]と順に吹くたびに、それぞれの音色と対になって事象が発生する。ショファールが Tekia（7 行目）と見張りの合図を吹き鳴らすと、死神がため息のうちに立ち去る（8 行目）。Schewarim（9 行目）のあとには、生命の種が撒かれる。„der Tod“ との意味的に対立において主語 „Das Samenkorn“ が新しい生命という意味合いを帯びるのである。Terua（10 行目）のあとには、類似構造を有する三つの構文„Die Luft erzählt“、„Die Erde kreist“、„die Gestirne kreisen“ が並置し、ショファールの吹奏により到来した新世界について、側面的描写が重ねられる。いずれも大気、大地、星々といった物質を主語とし、その行為が擬人化の技法により描かれ、時間によって関連づけられている。

14 行目から詩の終わりまでは、ショファールを吹くという行為およびそれに起因する事象が交互に描かれている。反復する „Einer bläst –“ とともに生じる事象は「寺院（Tempel）」に関するものであるため、それ以前の詩行と異なる新たなパラレリズムが形成されている。すなわち、いずれも „um den Schofar“ で始まる三つの詩行、および聖書の文体を大いに想起させる „Und ~“ で始まる三行である。寺院にまつわる事象が „brennt der Tempel“（16 行目）、„stürzt der Tempel“（18 行目）、„ruht die Asche“（20 行目）と段階的に推移しており、旧約に記された二度にわたるイスラエル神殿の崩壊を思わせる。

このように、詩行を単位として、ショファールの吹奏とそれに伴う事象の発生の描写が、因果関係に基づくメトニミーによって展開し、詩が旧約やユダヤ的テーマとの密接なつながりにおいて構成されている。

以上、第一詩集から例を挙げてメトニミー分析を行った。その結果、ジェノサイドの描写に関わる複数の文構造

---

11 ショファールとは、雄羊の角で作られた原始的なユダヤの楽器で、主に新年にジナゴーグで演奏されるものである。マルティン・ブーバーによると、ショファールの吹奏はメシアの到来を告げるという伝承が残っているという。Buber, Martin: Die Erzählungen der Chassidim. Zürich 1990, S. 149

12 これらの語の意味については、ザックス自身が書簡中で説明している。ザックスによると、ショファールの奏法の種類である「テキア（Tekia）」は見張りの合図を、「シェヴァリム（Schewarim）」は歌の合図を意味しており、「テルア（Terua）」は新年に演奏される連続的なかん高い音色で、天使や新しい世界の到来を表明するものであるという。Sachs, Nelly: Sachs, Nelly: Briefe der Nelly Sachs. Hrg. von Ruth Dinesen 1984, S. 65

が意味的、構造的な類似性を保ち、時に漸次的な差異化を生みながら並置し、発想の連続、対称、因果関係といった隣接関係にある例が多く検出された。死は決して抽象化されず、身近なジェノサイドの犠牲者たちが描写の対象として取り上げられ、彼らに起こる出来事や身体の部分の側面的描写の集積によって近接的に形成されている。時にはこれらの像は、旧約にさかのぼるユダヤ人の受難の歴史の上に位置づけられる。このようにして、ザックスは現代のジェノサイドを強烈なリアリティーをもって描き、その壮大さを物語ることに成功したのである。

2.2　第二詩集『星の蝕』(1947-48 年)

1947-48 年に成立し 49 年に出版された第二詩集においても、メトニミーは第一詩集とほぼ同じ頻度で出現し、詩の主導原理として働いている。しかし、メトニミーに関与する語彙、テーマには変化がみられ、身体の部分等が関与するタイプのメトニミーも、数例を除いて姿を消している。難解なメタファーの増加と相まって、極めて具体的だった犠牲者の像は、加害者らの像とともに抽象・概念化する。さらには、ジェノサイドと旧約の世界との関連づけから旧約の世界そのもののへとテーマが移行する。以下、抽象・概念化する生と死、および旧約のテーマについて、メトニミー分析を行う。

[…]	[…]
Nacht, Nacht	夜よ、夜よ
Einmal warst du der Geheimnisse Braut	かつておまえは神秘の花婿だった
[…]	[…]
Einmal warst du der Traummalereien	かつておまえは夢の絵描きであり、
jenseitiger Spiegel und orakelnder Mund –	彼岸の鏡であり神託の口だった―
[…]	[…]
Nacht, Nacht	夜よ、夜よ
jetzt bist du der Friedhof	おまえは今
für eines Sternes schrecklichen Schiffbruch	ある星のおそるべき難破のための墓地となった―
geworden –	[…]
[…]	FS076

„Nacht, Nacht“ という呼びかけを伴った三種類の詩行が並置している。Nacht のイメージは、肯定的な「花嫁 (Braut)」から、将来の夢を描き、彼岸を映し出し、占うという、未来に関わるものへ、その後、死に結びつく「墓地 (Friedhof)」へと変化する。時制は過去形から現在形へ変化し、将来へ希望を見出せた過去との対比において、現在の絶望が描かれている。連と連の隣接関係は、意味と構造の両面において対照的であるといえる。また、墓地は「ある星のおそるべき難破のため」にあるといい、死は人間以外の比喩的存在である。

[…]	[…]
Schritte –	足取り–

Urzeitspiel von Henker und Opfer,	絞首吏と犠牲者の始原の戯れ
Verfolger und Verfolgten,	迫害者と迫害される者
Jäger und Gejagt –	狩る者と狩られる者
Schritte	足取りは
die die Zeit reißend machen	時を急がせ
die Stunde mit Wolfen behängen,	時にオオカミをぶら下げ
dem Flüchtling die Flucht auslöschen	亡命者を血まみれにさせ
im Blute.	逃亡を終わらせる。
[…]	[…] FS077-078

犠牲者の抽象化が言語使用に端的に表れている。並置する三種類の „Henker und Opfer“、„Verfolger und Verfolgten“、„Jäger und Gejagt“ は、いずれも無冠詞であることから、これらは二項対立的な概念的意味合いが強い。続いて、Schritte を主語とし、四格目的語を取る現在形動詞が最後尾に現れる三つの類似構造が並置している。時間を駆り立て、殺害のために追いかけ、追いつき、死に至らしめる加害の行為が、時間軸に沿った事象の漸次的変化として描かれている。ここでも、Schritte という身体にかかわる文の構造的、意味的連続として詩行が成り立っている。

O DIE HEIMATLOSEN FARBEN des Abendhimmels!	おお、故郷なき夕方の天の色彩！
O die Blüten des Sterbens in den Wolken	おお、雲々のうちにある死の花たち
wie der Neugeborenen Verbleichen!	新生児たちが死にゆくごとく！
[…]	[…] FS117

感嘆詞と名詞句の並置によって、イメージの漸次的展開が観察される。色彩、とりわけ夕焼けの空を思わせる赤色が「故郷を失った色」であるとされ、それが第二詩行で、夕焼けの雲の色 „in den Wolken“ に反映され、死の花が咲く。「新生児（Neugeborenen）」と対比される死すべき存在は人間ではなく物質である。

[…]	[…]
Völker der Erde,	地球の諸々の民よ、
zerstöret nicht das Weltall der Worte,	ことばの宇宙を壊すことなかれ、
zerschneidet nicht mit den Messern des Hasses	憎しみのナイフで壊すことなかれ
den Laut, der mit dem Atem zugleich geboren wurde.	息とともに生まれた音を。
Völker der Erde,	地球の諸々の民よ、
O daß nicht Einer Tod meine, wenn er Leben sagt –	おお、誰も死を思うことなかれ、その者が生を語る時—
Und nicht Einer Blut, wenn er Wiege spricht –	そして血を思うことなかれ、その者がゆり籠を語る時—

第二連 2-4 行目が、否定を含む命令文として並行している。四格の目的語句が „das Weltall der Worte“ から „den Laut“ へ変化し、破壊の対象としての「ことば」は、人間の息となり、音として発せれることばへ意味展開する。可能性としての破壊の対象は、人間ではなくことばである。

ABRAHAM	アブラハム
O DU	おお、あなた
aus dem mondversiegelten Ur,	あなたは月に封印されたウルからやってきて
der du im Sande der abtropfenden Sintfluthügel	滴り落ちるノアの洪水の丘の砂に
die sausende Muschel	神の秘密の
des Gottesgeheimnisses fandst –	ざわめく貝殻を見つけた―
	あなたは天の農夫の穀粒を投じた、
O du	
der du aus dem weinenden Sternbild Babylons	おお、あなた
den Äon des lebenden Lebens hobst –	あなたは泣いているバビロンの星座からやってきて
das Samenkorn des himmlischen Landmannes warfst	生ける生命の永劫をかかげた―
bis in den feurigen Abend des Heute darin die Ähre brennt.	永劫の燃える、今日という日の焔の夕べに向かって。
[…]	[…]
O du	おお、あなた
aus Chaldäas Sterndeuterhafen	カルデアの星占いの港からやってきて
[…]	[…] FS088-089

各連は、題名の ABRAHAM を指す呼びかけ„O du“ によって始まっている。アブラハムの像はまず、彼の出自によって形成される。「月に封印されたウルからやってきて」（第一連 2 行目）、「泣いているバビロンの星座からやってきて」（第二連 2 行目）、「カルデアの星占いの港からやってきて」（第三連 2 行目）という前置詞句において、アブラハムの故郷である Babylon、その首都 Ur、バビロンの別称 Chaldäa の地名が順に出現する。こうした固有名が様々のメタファーと修飾関係を保ちながら、アブラハムの出身地に関するイメージが差異化を志向しながら展開している。du を主語とする関係節においてもアブラハムの行為の描写が重ねられている。「見つけ（fandst）」（第一連 5 行目）、「掲げ（hobst）」（第二連 3 行目）、「投げる（warfst）」（同 4 行目）という一連の行為の連続、また四格目的語に関わる命の神秘、生命、生命の源である「穀粒」といったメタファーもまたイメージの連鎖を引き起こしている。語と語が対応しているのではない。構文レベルにおいて、アブラハムという旧約聖書の登場人物の像が側面描写の集積として形成されている。

HIOB	ヨブ
[…]	[…]
Deine Augen sind tief in deinen Schädel gesunken	おまえの両眼は頭骸骨のなかへ深く沈んでいった
wie Höhlentauben in der Nacht	狩人が夜に手探りで取ってくる
die der Jäger blind herausholt.	洞穴のハトさながらに。
Deine Stimme ist stumm geworden,	おまえの声は黙ってしまった
denn sie hat zuviel Warum gefragt.	おまえの声があまりにも多く「なぜ」と問うたから。
[…]	[…] FS095

旧約聖書に登場するヨブの像が、身体の部分に焦点を当てた描写の累積により形成されている。二つの構文「おまえの両眼は頭骸骨のなかへ深く沈んでいった」(1 行目) と「おまえの声は黙ってしまった」(4 行目) において、ヨブの身体の部分を表す „Deine Augen“ と „Deine Stimme“ がそれぞれ主語として行頭に現れ、いずれも完了形の構文を形成する。旧約聖書において、ヨブは盲目になっても最後まで神に問いを立てる。声は唯一ヨブに残されたはずのものであるが、詩中ではこれも失われてしまう。ヨブは神に問いかける最後の手段であることばをも喪失するのである。

以上、第二詩集のメトニミー分析を行った。第一詩集に比べ、第二詩集では、現代のジェノサイドの旧約との関連づけから、旧約の世界そのものをテーマとした詩が増加した。メトニミーは旧約の人物像の形成、および生と死の抽象的、概念的描写により多く寄与し、現代のジェノサイドのテーマはより暗示的、間接的となった。

2.3 第三詩集以後

第三詩集以後、急速に強まる詩テクストの傾向として、シンタクスの崩壊、句読点の欠如、構文そのものの減少に伴う構文レベルでのメトニミーの減少、同じテクスト内におけるメタファーの複雑・多様化とその相互関連の曖昧・希薄化に起因する統一的テーマの見えにくさ等が挙げられる。なかでも、句読点の欠落とシンタクスの崩壊は、これまで語よりも大きな言語レベルにおけるメトニミーの現象に注目して分析を進めてきた筆者に、再び語句レベルでの観察に戻ることを余儀なくさせる。1959 年成立の第四詩集『逃亡と変容 (Flucht und Verwandlung)』の途中から、どんなに一連が長くても連の最後にしか句読点を打たないという文体の変化が始まり、1960 年成立の第六詩集『なお生命は死を祝う (Noch feiert Tod das Leben)』の途中から最晩年の詩集『開け、夜よ (Teile dich Nacht)』にいたっては、一貫して句読点が現れない。わずかにスラッシュとコロンがみられるだけである。この現象は語句レベルで成り立つ短い詩行の増加とほぼ比例している。

WELCHE FINSTERNISSE	何という闇
hinterm Augenlid	まぶたの下
angeglänzt	郷愁という
von der explodierenden Abendsonne	爆裂する夕日に

des Heimwehs	照らされて	
Strandgut	海難貨物	
mit dem Seezeichen	海難信号を発し	
königlich	王のごとく	
schlafbewachsen	眠り覆い隠されて	
Schiffbruch	難破船	
Hände aus den Wellen	波でできた手	
fliehende Versuche	神を捕らえるという	
Gott zu fangen	敗走する試行	
Bußweg	贖罪の道	
umarmend	抱きしめながら	
Meilensteine aus Meer	海の里程標	
O keine Ankunft	おお来臨なし	
ohne Tod –	死なくしてー	FS311
SCHWARZ	黒	
Laut in der Agonie	瀕死の苦しみにある音	
Unterpfand der Nacht	夜のあかし	
für des Tages leichte Vergoldung	昼の軽やかなきらめきのために	
Waise im Orden der Farben	色の修道会にいる孤児	
in deinen Katakomben	おまえの地下墓所で	
Besessenes Verstecken spielt	取り憑かれたものがかくれんぼし	
gräbt nach Entrücktem	月がおまえの表意文字を書く	
deine Ideogramme schreibt Mond	引き離されたものへと葬る	
Leiche – Das Lotosblatt	死体ー蓮の葉は	
ist ein Loch	ひとつの穴	SL158

上記二編では、語句を最大の言語単位とした詩行が目立つ。たとえば、SL311 第二、三連では、詩行が名詞、前置詞句、副詞、不定形の動詞、名詞・・・と続き、これらの語句には、統語関係はもとより、相互に明らかな意味関連を見出すことができない。こうした配列は、単なることばの羅列であり、そこに明らかな連続性を備えた詩行の展開はもはやみられない。

次に、第一詩集でジェノサイドを描く手法として機能していたメトニミーの特徴という観点から、後期詩集の特徴を検討したい。先に述べたように、生と死の描写の抽象化、神話化は第二詩集ですでに観察されたが、後期詩集においてジェノサイドのテーマは完全に消えたわけではない。

SZENE AUS DEM SPIEL NACHTWACHE	劇『夜警』の場面より
DIE AUGEN ZU	目を閉じる
und dann –	そうすると－
Die Wunde geht auf	傷が口開く
und dann –	そうすると－
Man angelt mit Blitzen	稲妻で釣りをする
O	おお
die Geheimnisse des Blutes	血の秘密
O	おお
für die Fische	魚たちのために
Alles im Grab der Luft	空の墓に眠るすべて
Opfer	犠牲者
Henker	絞首吏
Finger	指
Finger	指
Das Kind malt im Sarg mit Staub	その子は棺に砂で絵を描く
den Nabel der Welt –	世界の中心を－
und im Geheg der Zähne hält	そして口にふくむ
der Henker den letzten Fluch –	絞首吏は最後の呪いを－
Was nun?	さて如何に？ FS375

シンタクスの欠落した第二連に三種類・四つの語 Opfer、Henker、Finger が現れる。„Alles im Grab der Luft“（第二連６行目）を含め、これらはジェノサイドを強烈なリアリティーをもって描いた第一詩集冒頭の詩「おお、立ち並ぶ

煙突よ」[13]を想起させることばである。ただし、これらの語はどれも無冠詞で、具体的な犠牲者、加害者像の形成には寄与していない。

さらに、後期詩集では、ジェノサイドを強烈に想起させるテーマは減少し、生と死はより個人的な問題として扱われるようになる。「戦後」と呼ばれる 1960 年代当時、ネリー・ザックスは、精神疾患のためスウェーデン国内の病院に入退院を繰り返す生活を送っていた。生と死の問題が、個人的問題へ移行していたことは、たとえば次のデータからも予測することができる。筆者作成のコンコーダンスによると、病気を意味する Krankheit やその形容詞 krank、およびこれらを含む複合語は全詩集で計 20 回出現する。このうち、初期詩集での出現回数はわずか 2 回であるのに対し、残り 18 回は、主として 1962-66 年に成立したとみられる第七詩集『燃える謎（Glühende Rätsel）』以降の晩年の詩集に集中している。

DER SUMPF DER KRANKHEIT	病というぬかるみが
zieht nach unten	沈みゆく
Irrlichterei sagt nein zum Tag	鬼火は昼に否といい
Nacht gähnt vor Barmherzigkeit	夜は慈悲を前にあくびする
Sterben spielt weit verzweigt –	死が分岐して戯れる－
Fallsüchtig jede Ecke empfängt	てんかんの如くどこででも受け止め
mit dunklem Arm	ほの暗い腕で
Schwarz ist die Lieblingsfarbe des Bittstellers:	黒は願いをたてる者の好む色
Komm und schenke mir Träume –	やって来い、そして我に夢を贈り給え－ SL172

「病気（Krankheit）」（第一連 1 行目）、民間信仰で死者の霊を意味する「鬼火（Irrlichterei）」（第一連 3 行目）、「死（Sterben）」（第一連 5 行目）、「てんかん（Fallsüchtig）」（第二連 1 行目）と、病や死に関することばが詩にちりばめられている。病床において書かれたこの最晩年の詩がジェノサイドという広大なテーマを掲げていると指摘できる要素は見あたらない。パラレリズムも見られず、ましてそこにメトニミーが支配的原理として働いていると指摘することは困難である。

句読点を打たず、統語関係をも断ち切った、語の寄せ集めのような詩テクストは、ザックスに特異な現象ではなく、ほぼ同時代のパウル・ツェランの後期詩集等にも特徴的にみられるものである。しかしそれが何故なのか、何を意味しているのかは筆者には不明である。確かに言えることは、このようなザックスの後期詩集に多くみられることばの並置の現象は、意味の断裂という点から、ユダヤ的思考原理としてのメトニミーという本稿の分析課題の対象にはならないということである。このことは、ザックスの晩年の詩集のうちにメトニミーによって描かれた 20 世紀のユダヤ人大虐殺というテーマの痕跡をたどることはもはや不可能であることを意味している。

[13]吉川（2007）4 頁を参照。

3. 結論

本稿では、ザックスの詩におけるメトニミーのあり方およびその機能の通時的変化の解明を課題とし、ザックス全詩集に一つの全体像を与えることを試みた。その結果、ユダヤ的メトニミーは、1940 年代のザックスの詩において、20 世紀ユダヤ人のジェノサイドを描写する主導原理として機能していることが明らかとなった。身近な存在について断片描写を重ね、物事に近接的に迫る描写のあり方は、ザックスのジェノサイドに対するユダヤ的なアプローチの方法であり、そうした言語使用にこそザックスのユダヤ性の本質がみえる。それに対して、後期から晩年の詩集では、メトニミーそのものの検出が次第に困難になり、テーマの抽象化が促進され、生と死の問題はより個人的なものとして扱われるようになった。語句を最大の言語単位として詩行を形成し、統語や句読法の崩壊が多く観察される後期詩集では、「並置」はもはやユダヤ的思考が働く場ではなく、単なる語の羅列として意味の断裂の現象となり、メトニミーによるジェノサイドの描写の痕跡をたどることは難しくなった。このことは、メトニミーという観点から晩年のザックスをとらえることの限界を示しており今後の研究課題となるだろう。さらに、この研究結果は、他の様々のユダヤ文学においても、これまであまり注目されることのなかったメトニミーの観点から研究が行われる可能性を示唆している。

（北海道大学大学院文学研究科　専門研究員）